



令和6年度羽田中学校だより

天 空 の 橋

令和6年6月18日

目指す生徒像…

Heart

Never Give Up

Do Our Best

大田区立羽田中学校

落ち着いた授業となるための取り組み

先週の生徒会朝礼で、東京都・大田区で行われる「ふれあい月間（いじめ防止強化月間）」について、生徒会と協力して羽田中としての取り組みを行うことを確認しました。その中で、学校内を落ち着いた空間の取り組みをすることも生徒会にお願いしました。また、学校側もその取り組みに努力することを生徒の方に約束しました。

今週の朝礼で、学校側の取り組みとして、次の三つを生徒に伝えています。

1 場にあった声を出すこと

- ・授業での声の大きさ、休み時間での声の大きさ、場所による声の大きさなど、場にあった適切な声や大きさを意識する。

- ・特に、教員室前、校長室前では大きな声を出さないこと（お客様がいることを考える）

2 授業では、基本的に手を上げて発言する。先生に質問されたり、指名されたりしないのに発言することはなしにする。（緊急の場合は別です）

- ・みんなに聞かせることになる、みんなの前でする質問は「みんなのためになること」を聞く。（それができる「プロの教師」になる）

3 授業の最初、切り替えのときには姿勢を正す。きちんとした姿勢にする。

- ・姿勢が崩れる人が多くなると、みんなの集中力がなくなります。
- ・学力にも影響します。

学校の空間を落ち着いたものにするためには、どれも重要です。

ただ、特に授業がうまく成り立たなくなってしまう状態に陥りやすいのが、「2」の項目です。授業によっては、授業の流れとは関係のない質問がでて、それで授業の流れがストップしてしまうことがあります。授業に関係のないことで盛り上がってしまうのです。そうならないための項目です。この取り組みは、意識して取組をしなくても「場にあった声」が出たり「場にあった質問」ができるようになれば、やめることになります。自由な仲でも「必要なことができる」ことが大事だからです。また、「ときとして脱線した話のように見えて、実はとても大事な話になっていく」などは授業の醍醐味です。でも、それは基本的に授業が落ち着いて進行する中で行われることです。ですから、「落ち着いて授業が進められる」となるまでの取り組みとなります。

14日（金）には、TGGに行っていました。そこでは、ある意味雑然とした状態でプログラムが進んでいます。でも、ほとんどの生徒は、楽しそうに活動に取り組んでいました。雑然とした中でも進むのは、プログラム（授業）が楽しいからです。授業が楽しければ、集中して取り組めるのはゲームをやっているときと基本的に同じです。ですから、授業を楽しくすることはとても大事です。先生方も努力をしていくことになります。ただ、授業の全てが楽しくならない、つまらないトレーニングが必要なのも確かです。そこで、授業が集中して受けられない状態をつくらないこと。それをまず取り組むことになります。雑然としている空間で、「勉強したい人」が集中できず我慢するのは、おかしい話です。みんなが楽しく授業を受けられるよう、教員も生徒も努力したいと思います。

学校に“正義の風”を！

羽田中に来てから、7年目になりました。私が来てからの羽田中の生徒は素晴らしいです。現在、「ふれあい月間（いじめ防止強化月間）」で取り組んでいる「いじめ」に関して言えば、悪質なものはほとんどありませんでした。差別的な思考により、相手が嫌がることがわかっていて行うような「いじめ」、集団で傷つけることを意図して行う「いじめ」、こういったいじめはありませんでした。多くの生徒は、それぞれの生徒がもつ多様性を受け入れ、それをうまく調和させながら生活しています。どこの学校でも「いじめ」はあります。特に、「相手が嫌だと思ったらいじめ」という定義に変わってからは、ない学校の方がおかしいです。生活していく上で必然的に起こる人間関係のトラブルはすべて「いじめ」になるからです（大人であっても、誰かの言動で「嫌な気持ち」になることはあります。それはもう「いじめ」が起きているということになります）。羽田中でも、そういった意味での「いじめ」は起きます。何気ない、でもちょっとした心ない言葉によって傷ついたり、仲間関係のノリでいじったり、遊びの延長で友だちを傷つけたり…そういったいじめです。もちろん、いじめである以上、その行為を許してはいけません。二度とないように当然指導します。ただ、継続して傷つけることを楽しむ意図のいじめはなかったのは確かです。また、指導したときに、教員に反抗的な態度をとる生徒もおらず、みな反省をする状態でした。この状態は、むしろ素晴らしい状態だったといっていよいと思います。ただ、一つだけずっと気になっていることがあります。それは、「いじめ」を受けた被害者である生徒が、そのほとんどの場合、加害者に対しての直接的指導を望まないことです。「いじめ」は、いじめられた生徒が悪いのではなく、いじめた生徒が絶対的に悪いです。これは、もう世の中の常識になっています（と思います）。ところが、被害生徒は加害者に対する指導を望まないのです。加害者の生徒からの報復が怖いのでしょうか。それとも、被害者の生徒が優しいのでしょうか。学校の指導としては、被害者本人の「指導してほしい」という意志が強ければ、本人の意志に反してまでは加害者に指導しません（当然説得はします）。だから、加害生徒にははっきりと「いじめ」の事実を認めさせて反省させる、というところまでいかないことも多いです（映画「ミンボーの女」の例のように、それでは加害者の行為がエスカレートする可能性もあります。しっかりと指導することでエスカレートしないのが実際であります）。

私は多くの学校で、生徒会を担当し「いじめをなくす運動」を生徒と共に展開してきました。その活動の中で、学校から「いじめ」が少なくなっていく様子を見てきました。当時は、どこでも学校が荒れた状態だったので、「いじめ」は学校の荒れとともにありました。教員の指導になかなか従わない生徒も取組当初は多かったです。加害生徒が、教員の指導に従わない状態が見える（予想される）とき、当然「いじめられた生徒」は加害生徒への直接の指導を希望しません。報復を怖れるからです。しかし、生徒自身の運動が広がり、いじめに真剣に向き合う生徒が増えると生徒の中の世論が変わってきます。「いじめはいけない」という思いが、生徒の共通のものとなります。正義派だが強い生徒も「いじめ反対」の声をあげます。そのうち、ふつうの生徒や、弱い生徒であっても、「いじめ反対」の活動に目に見える形で取り組みます。学校に“正義の風”が吹くようになります。“正義の風”が吹いた学校では、いじめをする側の生徒の方が肩身が狭くなります。集団から浮いてしまうようになります。このような状態になると、荒れた時代であっても、落ち着いた、でも活気のある学校になっていきます。教師により抑えられて静かになった状態ではない、生徒が自ら社会をつくりあげた状態になるからです。このとき、「いじめ」があったとき、被害者が「加害者を指導しないでほしい」とはなくなります。正義がどちらの側にあり、一般の生徒集団がどちらの味方をするかが見えるからです。（当然、相手がとんでもないならば別です）

羽田中の生徒は、基本的に素晴らしい生徒だと思います。でも、自分たちの集団の中に、“正義の風”が吹いているかということ、まだ吹いていないのではないかと思います。上記のような経験をしている私は、素直にそう思います。被害者が「加害者を指導しないでほしい」と言うことが悪いとは思っていません。きっと、いろいろな事情があって、指導されることに不安があるのでしょう。状況がそうさせている可能性が高いです。ただ、「加害者を指導しないでほしい」となってしまうのは、（被害者の問題でなく）生徒社会の中に、まだ“正義の風”が吹いていないのだと思います。集団が自分の味方をしてくれる感覚がなかったり、加害者の側についていたりとの予想がされます。その結果として加害者が何も変わらず報復をしてくる様子が見えてしまうのだと思います。（もしかしたら、加害者が指導されるとかわいそうだから、と思っているのかもしれませんが……）

羽田中の生徒は確かに、悪い状態ではありません。むしろ素晴らしいです。でも、まだ自分たちの中に正義が打ち立てられていません。もしかしたら、先生たちの指導に素直に従っている状態なのかもしれません。でもそれは、本当の意味での自分たちの社会の規範を自分たちでつくっていないのかもしれないのです。そして、それを生徒自身が感じているからこそ、「加害者の指導を望まない」、そう思えます。6月の「ふれあい月間（いじめ防止強化月間）」では、羽田中として、生徒会として「いじめ根絶」に取り組んでいます。その結果、「いじめがいけない」ということを、みんなの前で、声高にみんなが主張できる状態になったのでしょうか。

学校に“正義の風”を吹かせよう！ 期待しています。